I'm home. 増刊
インドアグリーンスタイル
Vol.3

indoor green style

グリーンと過ごす。
グリーンと暮らす。

ガーデンデザイナーが提案する
インドアグリーンスタイル。

Gardener Style

海外特集●from Milan
グリーンとともに暮らす人たち。
ベーシックスタイルで楽しむインドアグリーン。

indoor green selection Ⅰ
Orchids［蘭］

indoor green selection Ⅱ
Succulents［サキュレント］

取材・文／高梨さゆみ（ラムズカンパニー）

indoor green Interview vol.1

インドアグリーンに対する世間の関心が高まる中、これに携わる企業のトップは何を考え、今後の展望をどのように見据えているのだろうか。今回は、ハイドロカルチャーを中心にインドアグリーンを扱うプラネット代表取締役 大林修一氏にインタビューした。

ブーム継続のキーは「メンテナンス」

大林修一●プラネット代表

インテリアグリーンの人気には大きく三つの理由がある。

熱狂的ともいえたガーデニングブームが沈静化する一方、インドアグリーンに対する熱い視線は日々温度を上げつつある。

「インドアグリーンの人気が高まっている理由は三つあると思います」と話すのは、ハイドロカルチャーによる植物の生産・販売をはじめ、植物レンタル業、屋上・壁面・水面緑化の計画・施工・メンテナンスなど、インドアグリーンをトータルに扱う㈱プラネットの社長、大林修一氏だ。インテリアグリーンのマスマーケットは雑貨ブームで格段に広がったと大林さんは言う。「雑貨と植物をマッチングさせることで、商品の魅力を強く訴求できる。それで、雑貨ショップでも植物を販売するようになったんです」そこで植物を購入するのは、今まで植物にまったく縁がなかった若年層だ。また、ガーデニングに失敗した人たちも、環境が比較的一定な室内なら失敗も少ないと考えて、インドアグリーンに移行してきている。

「最近、インドアグリーンが室内環境の向上に役立つことが広く浸透してきています。これもインドアグリーンの人気を高めている要因ですね」と大林氏。シックハウス症候群が問題にされる中、その原因とされるVOC（有害化学物質）の軽減に貢献することでインドアグリーンは大きな注目を浴びている。また、植物はさわやか要因ともいわれるマイナスイオンを放出することで、空気浄化にも役立っている。そうと聞けば、誰もが部屋にひとつグリーンを置いてみようという気になるだろう。

さらにもうひとつ、植物による園芸療法が注目されていることも人気の高まりの理由だ。「光もなく、風通しも悪いビルや室内は、本来植物が元気に育つ場所ではありません。でも、ちゃんとケアをすることで植物は元気を回復していく。それは同時に、ケアをする人の病んだ心や体をも元気にしていくのです」。園芸療法への理解がもっと高まれば、インドアグリーンのマーケットはさらに拡大するに違いない。

ベランダまで取り込めば、インテリアグリーンの世界は魅力が倍増する。

インドアグリーンの人気は、このままではガーデニングのブームのように一時の盛り上がりで終わってしまうのではないか、と大林氏は懸念もしている。「インドアグリーンのブームを長く持続させるためのキーワードは“メンテナンス”だと思っています」花でも野菜でさえも、メンテナンスさえきちんとすれば室内で鑑賞することができると大林氏はいう。要は、植物を室内とベランダで出し入れすればいいのだ。昼間は太陽光をたっぷり浴びさせ、夜は室内に取り入れてゆっくり鑑賞する。その実践として、大林氏は来春から野菜コンテナのレンタル事業を立ち上げる予定だ。色鮮やかなカラーピーマンやミニトマト、ナスなどを実が結び始めた段階で家庭やオフィスに届け、実を収穫し、枯れた段階で回収するという。実が徐々に膨らみ、色づいていく過程をじっくり楽しめる野菜育てには、グリーンにはないワクワクするようなストーリー性があり、家族みんなで楽しむこともできる。では、いったい誰がそのケアを行うのか。「屋上、壁面、水面緑化などが地球環境に良いと分かっていても、広く普及しないのはコストのかかりすぎが原因なんです」と大林氏。新事業の野菜レンタルも含め、その地域の居住者がきちんとケアをできれば、人材の派遣費は大幅に削減できる。そんな人材を育成するために、プラネットでは、一般の主婦や高齢者を対象にメンテナンス技術や植物のコーディネートについての専門知識を指導するスクールを開設した。全36回のカリキュラムで修了者には独自の資格を与え、「メンテナンスマスター・グリーンコーディネーター」として認定する。地方居住者には通信教育で対応も検討中だという。年内にはNPO組織も発足させる予定で、これが全国展開すれば、将来的には都市緑化計画の大きな後押しになるだろう。

また、大林氏はメンテナンスをより手軽にするためのツール開発も手がける。植物を寄せ植えしてしまうと移動もなかなかできない。大林氏が考案したカセット式のコンテナなら、植物を購入したポットのままはめ込めばだけでバランスのいいデザインに仕上がる。いわゆる寄せ鉢だ。これなら室内とベランダへの相互の移動も、植物の交換・デザインの変更も手軽にできる。

さらに、他業種とのコラボレーションにより、インドアグリーンの可能性をさらに高めようという試みもある。大林氏は家具メーカーと組み、初めから植物スペースを組み込んだデザインの家具を考案中だ。また住宅・建材メーカーとのコラボレーションでは、植物によるVOCの軽減や空気浄化をより効果的にするためのハウスデザインも検討されている。

植物と共生する暮らし方、それは現代を生きる人々にとって、自らの生命を守り、さらなる快適性を得るためのマスト条件だ。それはいまや心から望めば、確実に手に入れられるのだ。

（たかなし・さゆみ）

プラネットが展開するコンポガーデンシステム。各植物は、カセット式のポットに植えられているので、自由に植物の交換ができる。季節やインテリアに合わせたさまざまなグリーンコーディネートが可能。

大林修一（おおばやし・しゅういち）

1958年愛知県豊橋市生まれ。千葉大学園芸学部卒業後、観葉植物の大手生産会社㈲大十園に勤務。植物組織培養など開発したのち90年㈱プラネット設立。ハイドロカルチャーを中心にした生産から卸し、レンタル、室内・屋上緑化の設計施工を行う。昨年5月には「ラグーナ蒲郡」内にグリーンショップ「プラネットマーケット」をオープンさせた。